

訪問看護



ステーション便り

問 訪問看護ステーション
☎ 32 - 2416

今月は、調子の悪い時に集中して訪問看護をご利用いただくことで、体調が良くなった事例をご紹介します。

『重度の褥瘡（床ずれ・寝だこ）が治ったBさん』

Bさん：88歳男性 脳梗塞 要介護5 奥様とご長男の3人暮らし



褥瘡がなかなか治らない

訪問看護を12年前からご利用いただいています。脳梗塞で10年前から、ひとりで起き上がることが難しくなり、ベッドでご家族の介護を受けて生活していました。



発熱をきっかけに食欲が低下し、足の骨に沿って褥瘡ができました。処置方法などの工夫をしてきましたが、なかなか良ならず、12カ月が経過したところで傷の数が増えてしまいました。

どのように過ごしたいですか

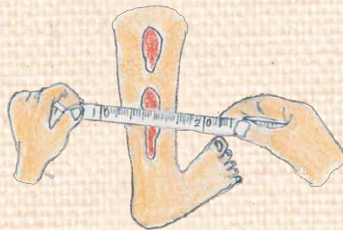
Bさん：家で安気に過ごしたい
ご家族：褥瘡があっても、みんなに助けてもらいながら家で過ごさせてあげたい

集中・連携して処置を

訪問看護の回数を週3回に増やし（月水金）、看護師2人で伺いました。週2回（火木）は訪問入浴に、週末（土日）はご家族が担当することで、毎日同じ処置ができるようにしました。

1週間毎に写真を撮り、大きさや深さを見て、傷が良くなっているか（処置方法が傷の状態に合っているか）を観察しました。

また、主治医と皮膚科医師に報告して助言・指示をいただき、処置変更時は訪問入浴やケアマネージャーにも伝えました。



栄養状態を整えて

食欲がないため、主に「くず湯」を召し上がっていましたが、食べる量にむらがありました。

食べられない時に飲んでいた高カロリー栄養剤を、1日3回、定期的に飲むことで食欲が出てきて、大好きな果物やお寿司・おはぎなどを召し上がれるようになりました。

環境を整えて

・褥瘡予防のエアーマットを、Bさんの傷の状態に合うものに変更しました。

・膿や浸出液で濡れたガーゼが常に皮膚に当たっている状態でした。ガーゼに、「補助パット」を当てることで蒸れを防ぐことができました。



傷をていねいに洗います

写真を撮って、経過を観察しました

Bさんは、4カ月間、集中してケアをすることで重度の褥瘡が治りました。

Bさんとご家族の「褥瘡があっても、ご自宅で過ごしたい」という思いを支えるために、ご家族とBさんに関わるサービス担当者（医師・病院看護師・ケアマネージャー・訪問入浴・福祉用具など）が、状態や処置方法を共有し、療養環境を整えることで良い結果が得られました。

注) 補助パット

尿やおむつ内の湿気を外に逃がして皮膚トラブルを予防します。尿パットやオムツと一緒に使います。



*ケア方法・経過・結果は、体調や環境など個人によって異なります。